

第1回 発達障害者支援地域協議会作業部会の委員の発言より 現状や課題

乳幼児期

【早期に保育所やこども園等の所属があり、児童発達支援センターを利用するケースが減っている】

【揺れ動く時期の保護者のこども理解や障害の受け止めを支える支援に関すること】

- ・幼児期にこどもと上手く向き合えなかったり、見ないで済ませてきたのかな、と感ずることもある。
- ・保護者が何を支援してもらえばいいかわからず、結果的にこどもが置き去りになる。
- ・最近の保護者は「どうしたら失敗せずに育てられるか」と「自分の子育てを失敗したくない」という思いが強すぎるようだ。

【将来を見据えた支援の大切さ】

- ・「大人になった時、社会に出た時に、こどもがどういう姿で社会の中にいてほしいのか」が大事。

【乳幼児期のこどもの発達支援に関すること】

- ・こどもが基礎集団の中で自分らしく生活していくために、療育がどう関わるのかが重要である。
- ・発達障害があるとわかると、サービスを利用しなくてはならないと捉える方が多いと思うが、そうではないと思っている。こどもが必要なことは一人一人違う。

学齢児期

【子どもアドボカシー、こどもが自分自身で考えられる力を育てる支援の必要性】

【予防的な視点での支援の必要性】

- ・ひきこもりや触法など、成人期での深刻な課題を予防するためには早い段階からの支援が必要。

【地域理解と協働の促進】

- ・町内会や企業ともコラボすることで、色々なこども達がいる等、理解を深めてもらうことにつながる。

【本人の楽しみをはぐくむこと、余暇の大切さ】

- ・「楽しいこと」を小さい頃から育み、自分の好きなことを披露できる場があるなど、「余暇」は発達支援の中で、とても大事なキーワードになる。

成人期

【障害の重い方の支援や過ごし方の広がりにくさ、支援者の人材不足】

【働くことだけに偏らない過ごし方の場、安心なコミュニティづくりの大切さ】

- ・働いているから成功ではなく、働いた後の過ごし方にニーズがある方が一定数いる。
- ・知的障害のある方が学校を卒業すると、自分たち自身でつながることが難しい。

【支援につながらずに大きくなった方へのアプローチ】

- ・自分の困り感を客観的に認識しにくく、相談につながりたくないという頑なな学生がいる。
- ・「グレーゾーンと思われる方にどのように関わったらよいか」等、企業からの相談も増えている。

【分野を超えたネットワークの必要性】

- ・自分らしい人生をデザインすることに至るためには、文化芸術活動だけに閉じると対応できないという問題意識から生涯学習領域の実践を始めた。

【親なき後に関すること】